

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Toward a Characterization of cognitivistic and non-cognitivistic cognitive semantics

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-12-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本多, 啓, Honda, Akira メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2611

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



試論：認知主義の認知意味論と非認知主義の認知意味論*

本多 啓

1 序節

1.1 はじめに

本稿は、認知意味論の内外においてこれまで提示されてきている、あるいは今後提示される可能性のある、言語現象についての議論や考え方のいくつかについて、「認知主義」をキーワードとして整理する試みである。

議論の前提として、まず次節で本稿で言う「認知意味論」とは何かについて述べ、その次の節で「認知主義」について述べる。さらに次の節で本稿の位置づけを述べたのち、第 2 節から本論に入る。

1.2 認知意味論

「認知意味論」をどう規定するかについては複数の考え方がありうる¹。一般には概念主義の意味論、すなわち言語表現の意味を概念化 (conceptualization; Langacker (1987, 2008)) と考えたり、言語の意味構造を概念構造 (conceptual structure) と関連づけたり (Talmy (2000)) する意味論と見なすのが主流と思われる。しかし本稿では、このような考え方の前提と想定されるレベルで「認知意味論」を考える立場を採る。その立場とは、認知意味論とは「捉え方の意味論」であると考えられる立場である。「捉え方の意味論」とは、「客観主義の意味

* 本稿執筆のきっかけは、2021 年 3 月に中京大学で行った講演 (本多 (2021a)) および 2021 年度大学院授業「欧米言語演習 (認知言語学研究) 1」にあります。関係者・参加者の皆様に感謝いたします。また、有益なコメントをくださった萩澤大輝氏とお二人の査読者にも感謝いたします。本稿の内容についての責任は本多にあります。なお、本稿のもとになった研究は、文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究 (領域番号 4903、課題番号 17H06379) の助成を受けています。

¹ 本節の内容は一部本多 (2021c) と共通である。

論」あるいは(素朴な)指示対象意味説に対置される²もので、次のような基本的な洞察に基づく。

- (1) ... the meaning of an expression is not determined in any unique or mechanical way from the nature of the objective situation it describes. The same situation can be described by a variety of semantically distinct expressions that embody different ways of construing or structuring it. Our ability to impose alternate structurings on a conceived phenomenon is fundamental to lexical and grammatical variability. (Langacker (1987: 107))

この洞察を踏まえると、「捉え方の意味論」すなわち認知意味論とは、言葉の意味(の記述)を、指示対象(の記述)と同一視するのではなく、対象に対する話者・概念化者の捉え方に基づいて考える立場ということになる³。「捉え方(construal)」とはLangacker (2019)の次の規定に示されるような概念である。

- (2) *Construal* is our ability to conceive and portray the same situation in alternate ways. (Langacker (2019: 140); イタリックは原文。)

分かりやすい事例として(3)がある。Coventry (2019)は、この2文が同一の状況を指し示すことができると指摘している。

- (3) a. The coffee capsule is **in** the dish.
(コーヒーカプセルが皿に入っている。)
b. The coffee capsule is **on** the plate.
(コーヒーカプセルが皿に乗っている。)

言語事実としては、同一の事物を dish と呼ぶことと plate と呼ぶことの両方が可能な場合があり、そして、その呼び方の違いによって前置詞の選択に影響が出る、ということである。

ここで、dish と plate が異なる意味の名詞であることは言うまでもない。また、前置詞 in と on の意味が異なることも同様に明らかであり、前置詞句 in

² 別の観点から言えば「表現解釈の意味論」とも対置される(本多(2005))が、それは本稿の趣旨とは別の問題になる。

³ ただし(1)で言及されている“structuring”を「捉え方」に必須と認めるかどうかは、「現実構成主義」という意味での認知主義を採るかどうかによる。第1.3節参照。

the dish と on the plate も議論の余地なく異なる意味を持つ。つまり、同一の状況を指し示すのに異なる意味の言語表現が用いられうるということである。

これに対する解釈ないし説明としては、同一の状況であっても、異なる捉え方がされれば、その状況を指示するのに異なる意味の言語表現を用いることができるということだと考えることができる。具体的には、当該の事物に関して「物を入れることができる」という属性ないし側面⁴に注目した場合には、その物は「入れるもの (dish)」としてカテゴリー化され、前置詞としては容器に用いられる in が使われるが、同じ物に関して「物を乗せることができる」という属性ないし側面に注目した場合には、その物は「乗せるもの (plate)」としてカテゴリー化され、前置詞としては面に用いられる on が使われる、ということである (本多 (2019))。

これは筆者が認知意味論の基本的な考え方としてしばしば言及する次の (4) の b に該当する例である。

- (4) a. 異なる対象に同じ捉え方を適用して捉えることが、異なる対象に同じ言語表現を適用することが可能になる仕組みの一つである。
- b. 同じ対象に異なる捉え方を適用して捉えることが、同じ対象に異なる言語表現を適用することが可能になる仕組みの一つである。
- (本多 (2016: 96))

このように認知意味論は、事物そのものだけではなく、そのものについての人間の捉え方を重視する。そしてこのように見たとき、「認知意味論」は「認知主義の意味論」を必ずしも意味しない。

1.3 認知主義

「認知主義」についても、認知言語学の枠内に限っても複数の理解のし方がある。以下、筆者に理解できた範囲で順不同に列挙する。

一つの理解のし方は、「認知意味論の立場」あるいは「認知言語学における言語や意味についての考え方」を「認知主義」と呼ぶ理解のし方である。たとえば西村・野矢 (2013) は客観主義あるいは(素朴な)指示対象意味説との対比で、「捉え方の意味論」としての認知意味論の立場を「認知主義」と呼んでいる。また Taylor (1995) は、構造言語学の立場 (structuralist) と対置される

⁴ 生態心理学 (Gibson (1979), 佐々木 (2015), 河野 (2003), 本多 (2019)) の用語でいえば、「アフォーダンス (affordance)」。

ものとしての認知言語学の立場を“cognitivist”と呼んでいる。この理解のし方においては、生成文法の多くは「認知主義」には含まれないことになる。

二番目の理解のし方として、心理学・認知科学における「行動主義」に対置される考え方としての「認知主義」を継承する理解のし方がある。言語学においては、言語に対して人間の持つ能力ないし知識という観点からアプローチする立場がこれに当たる。認知言語学がこの立場を採ることは言うまでもないが、この理解のし方においては、生成文法も「認知主義」の言語学に含まれる。小早川 (2018: 173 注 11) および廣瀬 (2003) がこの理解のし方を採り、かつ支持している。

山梨 (2021) は生成文法について、「メンタルなモデル重視のトップダウン的なアプローチ」の言語観を採用している点で、「広義の認知主義」としている (p.58)。この理解も二番目の理解のし方に該当する。ただし、生成文法が問題にする言語の意味についての知識が、「母語話者が外部世界と相互作用する過程を通して得られる身体的な経験からは独立した、先験的で生得的な意味知識としての位置づけが与えられる」(pp.58-59) ものであることから、この認知主義は「プラトンの認知主義 (ないしは先験的な認知主義) とみなされる」(p.59) とし、「<認知主義—1 >」(pp.58-59) と呼んでいる。

そして山梨はこれと対置して、認知言語学の立場を「<認知主義—2 >」(pp.58-59) として提示している。それは「日常言語の文法は、言語主体と外部世界の相互作用に基づく身体的な経験を根源的な基盤とする認知能力に根ざしている、という経験基盤主義を背景としている」もので、「意味に関する知識は、先験的な知識として存在するのではなく、言語主体の身体化された認知能力から発現してくる」という考え方である (p.59)。山梨はこのような認知言語学の立場を「身体論的な認知主義」(p.59) とし、「<認知主義—2 >」と呼んでいる。

山梨の言う<認知主義—1 ><認知主義—2 >は、いずれも、言語に対して人間の持つ能力ないし知識という観点からアプローチする立場と言える。したがって、山梨の二分類は、ここで言う認知主義についての第二の理解のし方を二分したものと位置づけることができる。

第二の理解に関連する第三の理解のし方として、生物としてのヒトが生まれつき持つ能力ないし知識を重視する立場がある。これは言語の「相対性」と対置される「普遍性」に注目する立場であり、(少なくとも主流の) 生成文法がこれに該当することは言うまでもないが、認知言語学あるいは認知意味論にお

いては廣瀬 (2003) がこの理解のし方を採っており、かつ支持している。

第二の理解に関連する第四の理解のし方として、「認知過程が生じる場を脳内だけと想定する」という立場がある。吉川 (2021: 217) は認知主義について、Adams and Aizawa (2010) に基づき、「認知主義とは、認知と呼べるものは (典型的には) 我々の脳内で生じている計算過程のみであり、心内の「表示 (representation)」を操作することが認知過程であるとする考え方である」としている。そして吉川はこの考え方を自身が依拠する 4E 認知の考え方 (extended 「拡張された」、embodied 「身体化された」、embedded 「環境に埋め込まれた」、enacted/enactive 「行為に基づく」 cognition) と対置している。吉川の理解のし方は、「言語に対して人間の持つ能力ないし知識という観点からアプローチする立場」という、ここで言う認知主義についての第二の理解のし方に含まれるものではあるが、それに加えて、「認知過程が生じる場を脳内だけと想定する」という面が強調されている⁵。

そしてこれも第二の理解に関連する第五の立場として、言語の「意味のありか」(locus of meaning) を、(外部) 世界ではなく人間が頭の中に持つ知識構造あるいは概念構造と想定する立場がある。第 1.2 節で短く言及したいいわゆる「概念主義」の意味論 (すなわち言語の意味を概念化 (conceptualization) と考える認知文法 (Langacker (1987, 2008)) や、言語の意味構造を概念構造 (conceptual structure) と関連づける考え方 (Talmy (2000)))、そして Lakoff (1987) の立場がこれに当たる。そして言語と言語の意味についてのこのような考え方に対して、Reed (1995, 1996) が生態心理学 (Gibson (1979), 佐々木 (2015), 河野 (2003), 本多 (2019)) の立場から批判を展開している。Reed は言語についての「心的表象を指示するもの」という見方を退け、言語を「環境に対する注意の向け方」という観点から論じている。

さらにこれと関連する第六の立場として、現実構成主義、すなわち「私たちが経験している世界は、認知によって構築されるもの」という立場がある。これは、認知意味論が「客観主義」あるいは (素朴な) 指示対象意味説を棄却して「捉え方の意味論」を採用することからの一つの展開と言える。たとえば Lakoff (1987) は、基本的实在論 (basic realism) と経験基盤主義 (experientialism) を採用し、認知の身体的基盤を重視する⁶一方で、客観主義批判の一環として、認

⁵ 山梨 (2021) の言う〈認知主義—1〉も、実質的に同じ立場である。

⁶ したがってその限りにおいて生態心理学の知見も評価する。

知が imaginative であることを強調する⁷。

認知文法も同様の現実構成主義の立場を採る。たとえば Langacker (2019) は次のように述べる。

- (5) Fundamental to conception is the asymmetry between its *subject* and its *object*. The subject (S) is the locus of neural activity through which it engages some facet of the world, the object (O). Activity mediated by receptor organs constitutes perceptual experience. The neural control of effective activity (instigation, proprioception, guidance) constitutes motor experience. As we construct our mental world, reaching progressively higher levels of abstraction and complexity, an increasing proportion of our experience is related only indirectly to perceptual and motor activity.

(Langacker (2019: 141); 下線は本多、それ以外の強調は原文。)

つまり認知文法も、認知の身体的（感覚運動的）基盤を重視しつつも、現実構成主義を採っているわけである。

認知言語学の中上級レベルの教科書として定評のある大堀 (2002) も、次のように述べている。

- (6) a. 言語がわれわれの経験する世界を構成するというとき、重要なのはどのような捉え方が取られているかという問題である。
b. 言いかえれば、ヒトの生きる世界は「ありのまま」の現実ではなく、認知活動によって構成されたものだということである。

(大堀 (2002: 2))

そして言うまでもなく、実在論を採り、知覚（そして認知）が veridical であることを強調する生態心理学は、このような考え方に批判的である⁸。

「認知主義」についての以上の理解のうち⁹、本稿では次節に述べる理由から、

⁷ そして生態心理学を明示的に批判している。

⁸ なお、上述のように現実構成主義は「捉え方の意味論」を採用することからの一つの展開と言えるが、極端な現実構成主義はこの「捉え方の意味論」を解体ないし無効化する可能性がある。

⁹ 「認知主義」の立場としては以上の他に「表象主義」「計算主義」(など)があるが、それについては割愛する。

第五の立場（言語の意味を概念化と考えたり、言語の意味のありかを概念構造と想定したりする概念主義の立場）と第六の立場（現実構成主義）に注目する。

1.4 本稿の位置づけ

前節で述べたように、本稿では「認知主義」として概念主義（第五の立場）と現実構成主義（第六の立場）を想定する。それは筆者の個人的な学問上の関心による。

筆者は1994年(Honda (1994), 本多 (1994))以来、捉え方の意味論としての認知意味論に生態心理学の知見を取り込む試みに関わってきた¹⁰。しかし「認知主義」についての前節の概観から明らかなように、(少なくとも主流の)認知意味論の考え方と、生態心理学の基本的な立場には相いれない面がある¹¹。筆者自身この点についての認識はあった¹²わけであるが、最近まで明示的な議論は避けてきた。

本稿は以上のような問題意識を踏まえたものである。この問題意識を踏まえて、「非認知主義的な認知意味論」（概念主義・現実構成主義によらない捉え方の意味論）の可能性を探る試み¹³のための基礎作業の一部として、認知意味論の内外で提示されてきた既存の、あるいは今後提示される可能性のある、議論や考え方のいくつかを、「認知主義」との関連で位置づけるのが本稿の目的である。具体的には、言語の意味に関わる議論や考え方を、可能な限りで次の4つに分類する。

- (7) a. 素朴な指示対象意味説
- b. 強い認知主義に基づく認知意味論
- c. 弱い認知主義に基づく認知意味論
- d. 非認知主義の認知意味論

なお、言うまでもないことであるが、本稿における諸研究の整理は網羅的なものではない。というよりむしろ、取り上げることができる研究の範囲は相当に限られたものである¹⁴。また本稿は、基本的にはそれぞれのアプローチの優

¹⁰ そのまとは本多 (2013a, 2019) にある。また深田・仲本 (2008) も参照されたい。

¹¹ その点からの筆者の議論に対する批判としては井上 (2018) などがある。

¹² それについては本多 (2005, 2019) を参照。

¹³ 「原因帰属」を環境に対する注意の向け方と見なしたうえで可能表現の認知的基盤と位置づけた本多 (2021b) はその一環である。

¹⁴ たとえばメタファーについての研究などは、非常に重要ではあるものの、紙幅の都合もあつ

劣を議論することを主たる目的としてはいない¹⁵。今後の議論のための基礎作業としての整理を主目的とするものである。そして、本稿で示す整理の枠組みも、確定的なものではない。その意味で、本稿の議論はあくまでも叩き台であり、「試論」である。

以上を踏まえて、次節から本題に入る。

2 事例: Queen Elizabeth と the mother of Prince Charles

(8) では同一人物を表すのに Queen Elizabeth と the mother of Prince Charles という 2 つの異なる言語表現が用いられている。

(8) Queen Elizabeth once visited a nursery school in Tokyo. The mother of Prince Charles was welcomed by many flag-waving children. (福地 (1985: 25))

この事実については、いくつかの分析の可能性がある¹⁶。

一つは、Queen Elizabeth と the mother of Prince Charles は同じ人物を指示対象としているため、この 2 つの表現の意味は同じであるという考え方である。この考え方をここでは「素朴な指示対象意味説」と呼ぶ。

言語表現	外界の事物 (指示対象)	意味
Queen Elizabeth	ある人物	その人物
the mother of Prince Charles		

表 1 (8) についての素朴な指示対象意味説

素朴な指示対象意味説に基づけば、(8) においては Queen Elizabeth と the mother of Prince Charles が同じ意味で使われていると考えることになる。しかしながらこの考え方は明らかに間違いであると感じられるであろう。Queen Elizabeth と the mother of Prince Charles は全く別の言語表現だからである。

て本稿で扱うことはできない。特にメタファーの成立基盤を共起性に求める議論 (Taylor (1995) が紹介しているメタファーのメトニミー起源説や、Grady (1997) が primary metaphor の基礎として提示している primary scene の議論など) はメタファーの身体経験的基盤を追求したものと位置づけることができるが、本稿ではそれらについて詳述する余裕はない。

¹⁵ ただし部分的に問題点を指摘するところはある。

¹⁶ 以下の議論は当該の表現の語彙的な意味を問題にするのではなく、(8) における意味を問題にするということに留意されたい。

ただし、そのような意味分析は実際に提案されている。村木 (1993) は (9) について、「文脈にしばられた類義性」としている。

- (9) a. 男は道端にコスモスを見つけた。そっと近づいてその花のかおりをかいだ。
 b. ベランダに出てみると、そこは日の光をうけてあたたかかった。
 c. 息子をさがしたのだが、信夫の姿はどこにもなかった。

(村木 (1993: 89); 下線原文。)

ここで村木が「類義性」の根拠としているのは、「同じ対象をさしている」(村木 (1993: 89)) ということである。これは素朴な指示対象意味説に基づく議論である。

認知意味論は、このような「素朴な指示対象意味説」が言語表現の意味についての考え方として適切ではないことを強調する。そして、言語表現の「意味」について、「指示対象」だけではなく、その対象についての人間の「捉え方」を考慮に入れる。

ただし、そこで代案として提出しうる考え方には、実は複数ある。その一つは、表 2 のアプローチである。この考え方をここでは「強い認知主義に基づく認知意味論的分析」と呼ぶことにする。

言語表現	(外界の) 指示対象	捉え方
Queen Elizabeth	ある人物	国家元首
the mother of Prince Charles		子を持つ母親

表 2 (8) についての強い認知主義に基づく認知意味論的分析

この分析は、ある人物を指示する際に、話者がその人物を「国家元首」として捉えた場合には Queen Elizabeth という表現を用い、「子を持つ母親」として捉えた場合には the mother of Prince Charles という表現を用いるという考え方である。

このアプローチは「捉え方」をストレートに分析に組み込んだものであるが、問題もある。話者が当該の人物を「子を持つ母親」として捉えたとき、この話者はこの人物を「国家元首」としては捉えていないのだろうか、ということである。この人物は同時に、国家元首であり、かつ子を持つ母親である。そして話者はそのことを知っている。したがって、話者がその人物を「子を持つ

母親」と捉えて the mother of Prince Charles と表現したときであっても、その話者は同時にその人物を「国家元首」としても認識している可能性が高い。だが、表2のアプローチではそのことを適切に把握することができない。

次に考えられるのは、表3のような分析である。この考え方をここでは「弱い認知主義に基づく認知意味論的分析」と呼ぶ。

言語表現	概念構造	概念構造内の指示対象 注意が向けられる概念構造内の側面
Queen Elizabeth	ある人物	国家元首
the mother of Prince Charles		子を持つ母親

表3 (8) についての弱い認知主義に基づく認知意味論的分析

このアプローチでは「強い認知主義に基づく認知意味論的分析」に伴う問題は生じない。

このアプローチでは、当該の人物について話し手が持っている概念構造あるいは知識のまとまりが意味の基盤となる。その知識の中には、表3には表示されていないが、その人物が国家元首であることと、その人物が子を持つ母親であることとの双方が含まれる。(つまり話者は、エリザベス女王がチャールズ皇太子の母親であることを知っている。) Queen Elizabeth という表現は、その概念構造内においてその人物が持つ国家元首という側面に焦点を合わせて注意を向けている、つまりその側面を指示対象としている。他方、the mother of Prince Charles という表現は、その概念構造内においてその人物が持つ母親という側面に焦点を合わせて注意を向けている、すなわちその側面を指示対象としている。これがこの分析の考え方になる。

この2つのアプローチは、この世界に実在するある1人の人物についての、話し手の捉え方を問題にしている。その点において、2つのアプローチはいずれも本稿の意味で言う「認知意味論的」な分析である。

表2のアプローチでは、話し手はその1人の人物を Queen Elizabeth と表現するときと the mother of Prince Charles と表現するときでは別ものと捉えていることになる。世界に存在する個体としては1人の人物が、頭の中では別ものと捉えられているわけである。一方表3のアプローチでは、Queen Elizabeth と表現するときも the mother of Prince Charles と表現するときも

頭の中の知識構造は同一である。すなわちこのアプローチでは、話し手はその1人の人物についてどちらの表現を用いたときでも同じものと捉えていることになる。世界に存在する個体としては1人の人物が、頭の中でも同じものと捉えられているわけである。その意味で、表2のアプローチは、表3のアプローチに比べて、話し手の頭の中での世界の構築の度合いが高いことになる。つまり表2のアプローチは表3のアプローチに比べて現実構成主義の度合いが強いことになる。

しかし表3のアプローチも、本稿で言う認知主義のアプローチには含まれる。このアプローチは、Queen Elizabethとthe mother of Prince Charlesの意味の違いを、概念構造（頭の中の知識構造）のどの側面に注意が向けられるかの違いと考えるものであり、これはこのアプローチが言語表現の意味のありかを概念構造と想定する概念主義の立場を採っているということだからである。

以上を踏まえて本稿では、表2のアプローチを「強い認知主義に基づく」とし、表3のアプローチを「弱い認知主義に基づく」としている。

最後に、表4のアプローチがありうる。この考え方をここでは「非認知主義的な認知意味論的分析」と呼ぶ。

言語表現	外界の事物	外界の指示対象 注意が向けられる外界の事物の側面
Queen Elizabeth	ある人物	国家元首
the mother of Prince Charles		子を持つ母親

表4 (8) についての非認知主義的な認知意味論的分析

この分析においては、当該の人物が国家元首でもあり、また同時に子を持つ母親でもあるという事実に基づき、Queen Elizabethはその人の持つ国家元首の側面に焦点を合わせて注意を向けている、すなわち指示対象としている、ということになり、他方、the mother of Prince Charlesは、その人の持つ母親の側面に焦点を合わせて注意を向けている、つまり指示対象としている、ということになる。

このアプローチは、Queen Elizabethとthe mother of Prince Charlesでは、話し手が同じ人物に対して異なる捉え方（注意の向け方）をしていると

いうことを認めている。この点において、このアプローチは本稿の意味で言う「認知意味論的」な分析である。しかしながらこのアプローチでは、Queen Elizabeth と the mother of Prince Charles の指示対象（注意の向けられる先）は、いずれも概念構造内にあるわけではない。現実中存在するその人が持つそれぞれの側面である。つまり、このアプローチが問題にしているのは、話し手の頭の中で起こっていることではない。つまりこのアプローチは概念主義を採っていない（したがって現実構成主義も採っていない）ことになる。その点において、このアプローチは「非認知主義的」ということになる。

そしてこのアプローチでは、Queen Elizabeth と the mother of Prince Charles はいずれも指示対象を外界に持ち、また両者の意味の違いはこの外界における指示対象の違いに対応する。その限りにおいて、このアプローチは（いわば「一周回った」）指示対象意味説であると言うこともできる¹⁷。

3 事例: 「しお」と「塩化ナトリウム」

第2節では個物を表す表現について語彙的意味にこだわらずに検討したが、本節では語彙的意味の問題を取り上げる。

- (10) a. 1分経ったらしおを入れてください。
 b. 1分経ったら塩化ナトリウムを入れてください。

「しお」¹⁸と「塩化ナトリウム」は、本多(2013b: 149-150)に示したように、使われ方にかなりははっきりした違いがある。これについてもいくつかの考え方がありうる。

素朴な指示対象意味説では、この2つの語を表5のように考えることになる。

このアプローチでは、「しお」と「塩化ナトリウム」の意味の違いは、原理的には両語の指示対象の性質の違いということになるはずである。それはNaClの純度の違い、あるいはいわゆる「ミネラル」類の含有率の違い、などである。また、両語の使い方の違いは、原理的には意味の違い、すなわち指示対象の性質の違いによって説明されることになるはずである。しかしそれには無理があ

¹⁷ 繰り返しになるが、以上の整理は関係の表現の語彙的な意味を問題にしてきたのではなく、(8)における意味を問題にしてきたということに留意されたい。

¹⁸ 「塩」という表記は「しお」とも「えん」とも読める。ここで検討するのは「しお」としての「塩」であるが、「えん」としての「塩」との混同を避けるため、本稿でも「しお」の表記を用いる。

言語表現（語）	外界の事物（指示対象）	意味
しお	ほぼ同じ化学物質	その化学物質
塩化ナトリウム		

表5 「しお」「塩化ナトリウム」についての素朴な指示対象意味説

るように感じられるであろう。別の考え方としては、意味と使用を区別して、使い分けのし方は意味とは独立の要因によって決まる、というものがありうる。その場合、使い分けに関わる要因としては、たとえば「コンテキスト」が挙げられることになるだろう。しかし「コンテキスト」の具体的・実質的な内容を規定することは困難である¹⁹。

強い認知主義に基づく認知意味論的分析では表6²⁰のようになる。

言語表現（語）	（外界の）指示対象	捉え方	捉える際の枠組み
しお	ほぼ同じ化学物質	基本的には調味料	日常的な知識
塩化ナトリウム		化合物	化学的な知識

表6 「しお」「塩化ナトリウム」についての強い認知主義に基づく認知意味論的分析

これは本多 (2003, 2013b) の立場である。

この「捉える際の枠組み」に言う「日常的な知識」には、〈食事〉〈料理〉〈ある種の信仰〉²¹などが含まれ、「化学的な知識」には化学についての、個人によって内実は様々な知識が含まれる。ある事物（ある化学物質）が、日常的な知識に位置づけられて捉えられれば調味料として捉えられて「塩」と表現され、化学的な知識に位置づけられて捉えられれば化合物として捉えられて「塩化ナトリウム」と表現される、というわけである。

¹⁹ 少なくとも次の問題が生じる。

- (i) a. どういうコンテキストでは「しお」が使われ、どういうコンテキストでは「塩化ナトリウム」が使われるのか。またそれはなぜか。
- b. そもそも「コンテキスト」とは何か。

²⁰ この表は分析者の観点から書いたものである。したがって、この表に書かれていること全体が、話者の知識の中に組み込まれていると主張するわけではない。以下、全ての表について同じ。

²¹ この〈ある種の信仰〉は「清めの塩をまく」などの例を説明するために立てたものである。

このアプローチでは、「しお」と「塩化ナトリウム」の使い方の違いを意味の違いに基づいて適切に説明することができる。しかしこのアプローチには Queen Elizabeth と the mother of Prince Charles の場合と同じ問題がある。ここで問題になっている化学物質は、同時に、調味料になりうるものであり、かつ化合物でもある。そして (10b) の話者もこのことを知っている可能性が高い。だが、このアプローチではこのことを適切に把握することができない。

弱い認知主義に基づく認知意味論的分析では表 7 のようになる

言語表現 (語)	概念構造	概念構造内の指示対象 注意が向けられる概念構造内の側面	直接関与する 概念領域
しお	ほぼ同じ化学物質	基本的には調味料	<食事>など
塩化ナトリウム		化合物	<化学>

表 7 「しお」「塩化ナトリウム」についての弱い認知主義に基づく認知意味論的分析

このアプローチでは、その物質について話し手が持っている概念構造あるいは知識のまとまりが意味の基盤となる。その知識の中には、この物質が調味料などとして用いられるものであること、そして同じこの物質が（塩素とナトリウムの）化合物であること、その 2 つの知識が同一の物質についての知識であること、などが含まれる。この概念構造に対して、日常的な知識、たとえば <食事> についての知識を枠組みとしてアクセスした場合には、この概念構造が持つ調味料という側面に焦点が合わせられて注意が向けられる、すなわち指示される。それが「しお」という表現で起こっていることである。一方、この概念構造に対して化学的な知識を枠組みとしてアクセスした場合には、この概念構造が持つ（塩素とナトリウムの）化合物という側面に焦点が合わせられて注意が向けられる、すなわち指示される。それが「塩化ナトリウム」という表現で起こっていることである。

その物質が調味料として用いられると知っているということは、その物質についての概念が <食事> という概念領域に位置づけられているということの意味する。また同じその物質が化合物であると知っているということは、その物質についての概念が <化学> という概念領域に位置づけられているということの意味する。さらに話し手は通常は、この 2 つの知識が同一の物質についての知識であるということも知っている。話し手の知識構造がこのようになっている

るということは、その物質についての概念が複数の概念領域に位置づけられているということである。このように、同じ概念が複数の概念領域に位置づけられている場合、その概念領域群が構成するまとまりを認知文法では domain の matrix (Langacker (1987: 147), Langacker (2008: 44)) と呼んでいる。

この matrix に位置づけられた事物についての概念構造ないし知識のまとまりは、その事物についてのフレーム (Fillmore (1982)) あるいは百科事典的知識 (Haiman (1980)) と言ってもよい。「しお」を用いる場合と「塩化ナトリウム」を用いる場合とでは、どちらの場合でもこの同じフレーム全体に一定の注意が向けられる (フレーム全体が活性化する)²²。それがこの両語についての「意味が似ている」という直観の基盤になると考えられる。ただ、「しお」の場合はそのフレームの中の基本は調味料という部分が特に強い注意の対象になり (強く活性化され)、「塩化ナトリウム」の場合には化合物という部分が特に強い注意の対象になる (強く活性化される) ことになる。

また、ここまでの議論のし方からも示唆されるように、認知文法はこの弱い認知主義に基づく認知意味論の立場を採っている。表7の「概念構造内の指示対象／注意が向けられる概念構造内の側面」は認知文法のプロフィールに当たり²³、「直接関与する概念領域」はベースの構成要素となる。

Taylor (1995) も同様の立場を採っており、次のように述べている。

- (11) *Salt*, in its everyday sense (i.e. “table salt”), is primarily associated with the domain of food: salt is a substance added to certain kinds of food in order to enhance their flavour; only secondarily is its chemical composition at issue. *Sodium chloride*, an expression with the same reference, is understood against the domain of chemical composition, and only secondarily in terms of its role as a food additive. (Taylor (1995: 86))

非認知主義的な認知意味論的分析では表8のようになる

表8の分析においては、当該の物質が調味料でもあり、また同時に化合物で

²² ここで「全体」という語を用いたが、これは厳密には正確な使い方ではなく、ここでこの語を用いるのは便宜的な使い方である。人間が持っている世界についての知識において、ここまでが「しお」「塩化ナトリウム」に関わる部分、ここから先が関わらない部分、というような明確な境界線が引けるわけではないからである。

²³ プロファイルが「注意の向けられる対象」であり、「概念構造内の指示対象」であるという特徴づけは Langacker 自身 (Langacker (2008: 66)) によるものである。

言語表現	外界の事物	外界の指示対象 注意が向けられる外 界の事物の側面	直接関与する捉 え方の枠組み
しお	ほぼ同じ化学物質	基本的には調味料	<食事>など
塩化ナトリウム		化合物	<化学>

表8 「しお」「塩化ナトリウム」についての非認知主義的な認知意味論的分析

もあるという事実に基づき、「しお」はその物質の持つ調味料などという側面に焦点を合わせて注意を向けている、すなわち指示対象としている、ということになり、他方、「塩化ナトリウム」はその物質の化合物という側面に焦点を合わせて注意を向けている、つまり指示対象としている、ということになる²⁴。このアプローチでも、「しお」と「塩化ナトリウム」の使い方の違いは意味の違いに対応することになる。

このアプローチは、「しお」と「塩化ナトリウム」では、話し手が（ほぼ）同じ化学物質に対して異なる捉え方（注意の向け方）をしているということを認めている。この点において、このアプローチは本稿の意味で言う「認知意味論的」な分析である。しかしながらこのアプローチでは、「しお」と「塩化ナトリウム」の指示対象（注意の向けられる先）は、いずれも概念構造内にあるわけではない。外界に存在するその事物が持つそれぞれの側面である。つまり、このアプローチが問題にしているのは、話し手の頭の中で起こっていることではない。つまりこのアプローチは概念主義を採っていない（したがって現実構成主義も採っていない）。その点において、このアプローチは「非認知主義的」ということになる。

そしてこのアプローチでは、「しお」と「塩化ナトリウム」はいずれも指示対象を外界に持ち、また両者の意味の違いはこの外界における指示対象の違いに対応する。その限りにおいて、このアプローチは（いわば「一周回った」）指示対象意味説であるということもできる。

以上をまとめると次のようになる。

(12) 素朴な指示対象意味説

²⁴ 非認知主義的なアプローチで指示対象を注意の対象としたのは、Reed (1995, 1996) の言語観を踏まえてのことである。

- a. 意味＝外界の事物（外界の指示対象）
- b. 「しお」と「塩化ナトリウム」は、意味はだいたい同じ。
- c. 意味の違いは指示対象の違い（NaClの純度の違いなど）に対応。
- d. 使い方の違いは意味の違いによるもの？ 使用（コンテキスト）によるもの？
- e. コンテキストとは？

(13) 強い認知主義に基づく認知意味論

- a. 意味＝外界の指示対象に対する捉え方
- b. 「しお」と「塩化ナトリウム」は、意味が違う。指示対象は同じだが、捉え方が違う。
- c. 「しお」はその物質を、基本的には調味料として捉えている。捉える際の枠組みは日常的な知識。
- d. 「塩化ナトリウム」はその物質を、基本的には化合物として捉えている。捉える際の枠組みは化学的な知識。
- e. 意味の違いは指示対象をどのようなものとして捉えるかの違い。
- f. 使い方の違いは意味の違いに由来。

(14) 弱い認知主義に基づく認知意味論

- a. 意味＝事物に対する捉え方
- b. 「しお」と「塩化ナトリウム」は、意味が違う。概念構造の中で、注目（指示）される側面（プロファイル）が違う。
- c. 「しお」は、日常的な知識という枠組み（ベース）でその物質についての概念にアクセスする。その結果、その概念の持つ諸側面のうち、基本的には調味料という側面に注目（指示、プロファイル）している。
- d. 「塩化ナトリウム」は、化学的な知識という枠組み（ベース）でその物質についての概念にアクセスする。その結果、その概念の持つ諸側面のうち、化合物という側面に注目（指示、プロファイル）している。
- e. 意味の違いは事物についての概念のもつ諸側面のうち、どの側面に注目（指示）するかの違い。

f. 使い方の違いは意味の違いに由来。

(15) 非認知主義的な認知意味論（一周回った指示対象意味説）

- a. 意味＝事物に対する捉え方
- b. 「しお」と「塩化ナトリウム」は、意味が違う。事物の持つ諸側面のうち、注目（指示）される側面が違う。
- c. 「しお」は、日常的な知識という枠組みで事物にアクセスする。その結果、その事物の持つ諸側面のうち、基本的には調味料という側面に注目（指示）している。
- d. 「塩化ナトリウム」は、化学的な知識という枠組みで事物にアクセスする。その結果、その事物の持つ諸側面のうち、化合物という側面に注目（指示）している。
- e. 意味の違いは事物の持つ諸側面のうち、どの側面に注目（指示）するかの違い。
- f. 使い方の違いは意味の違いに由来。

4 事例: 構文交替

いわゆる「構文交替」についても、同じような整理ができる。以下では素朴な指示対象意味説についての議論は割愛して、認知意味論的な考え方のみに関及する。

なお、本稿では第3節と第4節で「語」と「構文」という書き分けをしているが、これは便宜上のものである。本稿は認知文法・構文文法の構文観を継承しており、「語」と複合表現としてのいわゆる「構文」について、どちらも同じように形式と意味の慣習的な組み合わせであると考えている。

次の(16)のような与格交替については、表9～表11のようにまとめられる。詳しい解説は割愛するが、ここには「しお」と「塩化ナトリウム」について述べたことがそのまま当てはまる。

(16) a. Bill sent a walrus to Joyce.

b. Bill sent Joyce a walrus.

(Langacker (1986: 14), Langacker (1991: 13))

²⁵ 「意味類型」は川野 (2020, 2021) の用語である。後述するように、川野 (2020, 2021) は構文交替に関してこの立場を採っている。

言語表現（構文）	（外界の）指示対象	捉え方（意味類型 ²⁵ ）
使役移動	ある種の事象	<物の移動>
二重目的語		<人物の所有者への変化>

表9 与格交替についての強い認知主義に基づく認知意味論的分析

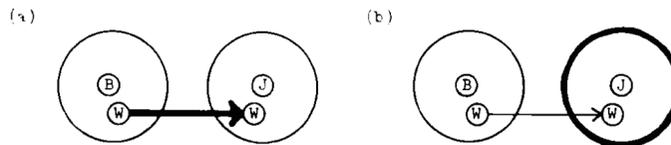
言語表現（構文）	概念構造（フレーム）	概念構造内の指示対象 注意が向けられる概念構造内の側面
使役移動	ある種の事象	<物の移動>
二重目的語		<人物の所有者への変化>

表10 与格交替についての弱い認知主義に基づく認知意味論的分析

言語表現（構文）	外界における事象	外界の指示対象 事象の側面（構成要素）のうち注意が向けられる先
使役移動	ある種の事象	<物の移動>
二重目的語		<人物の所有者への変化>

表11 与格交替についての非認知主義的な認知意味論的分析

認知文法はここでも弱い認知主義に基づく認知意味論的分析を採用している。そのことは(16)の意味構造を表示した図1にも現れている。



(Langacker (1986: 14), Langacker (1991: 14))

図1 認知文法における与格交替の分析

図の(a)が使役移動構文（与格構文）に対応し、(b)が二重目的語構文に対応する。

Langacker の考え方を受け継いだ西村 (2002) も、構文交替に関して弱い認知主義の立場を採っている。与格交替については、西村は (17) に関して (18) のように述べている。

- (17) a. Sally sent a letter to Harry.
 b. Sally sent Harry a letter. (西村 (2002: 300))
- (18) Langacker (1987: 39-40, 1990: 13-15) が主張したように、[17] のような与格交替の典型例では、a と b が共通に喚起する < X が自分の領域から Y の領域に Z を移動させ、その結果 Y が Z を所有するようにさせる > という授与のフレームのうち、a の焦点が (Z の Y への) < 移動 > という局面にあるのに対して、b は (Y による Z の) < 所有 > という局面を焦点化している。 (西村 (2002: 300))

フレームとは上述のように人間が頭の中に持っているまとまりのある知識構造のことであるから、この考え方は概念主義を採っていることになって、本稿で言う弱い認知主義の立場に該当することになる。

さて、次の (16)(19) および (20)(21) について、これまで整理してきた各種アプローチではどのように対応することになるだろうか。同一の動詞で、使役移動構文と二重目的語構文の両方が同じように自然になる場合と使役移動構文の方が自然になる場合とがある ((16)(19)) という事、また同一の動詞で両方の構文が同じように自然になる場合と二重目的語構文の方が自然になる場合とがある ((20)(21)) という事についてである。

- (16) a. Bill sent a walrus to Joyce.
 b. Bill sent Joyce a walrus.
- (19) a. I sent a walrus to Antarctica.
 b. ?I sent Antarctica a walrus.
 (Langacker (1986: 15), Langacker (1991: 14))
- (20) a. I gave a book to John.
 b. I gave John a book. (Green (1974: 71))
- (21) a. Mary gave John an inferiority complex.
 b. *Mary gave an inferiority complex to John.
 (Green (1974: 82, 83))

強い認知主義に基づく認知意味論的分析では、次のような説明になる。事象が、〈物の移動〉としても〈人物の所有者への変化〉としても捉えられる性質のものならば、両方の構文が自然になる。事象に対して、〈物の移動〉と〈人物の所有者への変化〉のいずれか一方としての捉え方のみが自然な場合には、自然な捉え方を反映した構文による表現のみが自然になる。

弱い認知主義に基づく認知意味論的分析では、次のような説明になる。当該の事象についての概念が、〈物の移動〉という側面と〈人物の所有者への変化〉という側面の両方を持ち、その両方が注意の対象となりうる程度の顕著性を持つならば、両方の構文が自然になる。事象概念に〈物の移動〉と〈人物の所有者への変化〉のいずれか一方の側面だけがある場合、あるいはいずれか一方の側面だけが十分な顕著性を持つ場合には、その側面に注目する構文による表現のみが自然になる。

非認知主義的な認知意味論的分析では、次のような説明になる。当該の事象が、〈物の移動〉という側面と〈人物の所有者への変化〉という側面の両方を持ち、その両方が注意の対象となりうる程度の顕著性を持つならば、両方の構文が自然になる。事象に〈物の移動〉と〈人物の所有者への変化〉のいずれか一方の側面だけがある場合、あるいはいずれか一方の側面だけが十分な顕著性を持つ場合には、その側面に注目する構文による表現のみが自然になる。

与格交替についての各分析の考え方をまとめると次のようになる。

- (16) a. Bill sent a walrus to Joyce.
b. Bill sent Joyce a walrus.

(22) 素朴な指示対象意味説

- a. 意味＝外界の事象（外界の指示対象）
b. 2つの構文は、同じ事象を指示対象にできる限りにおいて、意味は同じ。
c. 意味の違いは指示対象の違いに対応。
d. 構文の使い方の違いは意味の違いによるもの？ 使用（コンテキスト）によるもの？
e. コンテキストとは？

(23) 強い認知主義に基づく認知意味論

- a. 意味＝外界の指示対象に対する捉え方

- b. 2つの構文は、意味が違う。指示対象は同じ外界の事象だが、捉え方が違う。
- c. 使役移動構文は、当該の事象を、物の移動として捉えている。
- d. 二重目的語構文は、当該の事象を、人物の所有者への変化として捉えている。
- e. 意味の違いは指示対象としての事象をどのようなものとして捉えるかの違い。
- f. 構文の使い方の違いは意味の違いに由来。

(24) 弱い認知主義に基づく認知意味論

- a. 意味＝事象に対する捉え方
- b. 2つの構文は、意味が違う。事象概念が持つ諸側面のうちの、注目・指示（指示）される側面（プロファイル）が違う。
- c. 使役移動構文は、当該の事象概念が持つ諸側面のうち、物の移動という側面に注目（指示）（プロファイル）している。
- d. 二重目的語構文は、当該の事象概念が持つ諸側面のうち、人物の所有者への変化という側面に注目（指示）（プロファイル）している。
- e. 意味の違いは事象概念が持つ諸側面のうち、どの側面に注目（指示）するかの違い。
- f. 構文の使い方の違いは意味の違いに由来。

(25) 非認知主義的な認知意味論（一周回った指示対象意味説）

- a. 意味＝事物に対する捉え方
- b. 2つの構文は、意味が違う。当該の事象の持つ諸側面のうちの、注目（指示）される側面が違う。
- c. 使役移動構文は、当該の事象が持つ諸側面のうち、物の移動という側面に注目（指示）している。
- d. 二重目的語構文は、当該の出来事の諸側面のうち、人物の所有者への変化という側面に注目（指示）している。
- e. 意味の違いは当該の事象の持つ諸側面のうち、どの側面に注目（指示）するかの違い。

f. 構文の使い方の違いは意味の違いに由来。

場所格交替についても同様の議論が成立する。

- (26) a. The farmer loaded apples into the cart. (使役移動)
 b. The farmer loaded the cart with apples. (状態変化)
 (例文は Levin (1993: 2) より。)

強い認知主義に基づく認知意味論的分析は表 12 のようになる。

言語表現 (構文)	(外界の) 指示対象	捉え方 (意味類型)
使役移動	ある種の事象	<物の移動>
状態変化		<移動先の状態変化>

表 12 場所格交替についての強い認知主義に基づく認知意味論的分析

この種の構文交替について、川野 (2020, 2021) はこの強い認知主義に基づく認知意味論的分析を採っている。川野は次の (27) に例示されるような「壁塗り代換」に関して (28) のように述べている。

- (27) a. 壁にペンキを塗る (～ニ～ヲ形)
 b. 壁をペンキで塗る (～ヲ～デ形)
- (28) a. 指示対象は同じだが、意味類型が異なる。 (川野 (2020: 44))
 b. 「～ニ～ヲ塗る」と「～ヲ～デ塗る」は現実世界の同一事態を指示している。両表現の意味の違いは、その同一事態を位置変化として捉えているのか、状態変化として捉えているのか、という点にある。 (川野 (2020: 46))

川野 (2020) の言う「意味類型」を概念主義および現実構成主義との関連でどのように位置づけるべきかについては、確定的に述べることは困難である。だが、(28b) および川野 (2016, 2021) も考慮に入れて判断する限りでは、「～として捉える」というときの「捉え方」と同じものと考えてよいと思われる。これは、「意味類型」による議論が現実構成主義を（したがって概念主義も）採っていると考えてよいということでもある。

先に第 3 節で「しお」と「塩化ナトリウム」に関して、当該の化学物質が同時に調味料になりうるものでありかつ化合物でもあるということが、強い認知

主義に基づく認知意味論的分析では適切に把握できないと述べた。この点に関連することを川野 (2021) は次のように述べている。

- (29) 2つ目は、本書の言う「2通りの類型化」とは、「事態が位置変化に見えている時には状態変化には見えず、状態変化に見えている時には位置変化には見えない」ということであり、「事態が位置変化の解釈と状態変化の解釈を同時に併せ持つ」ということではない、という点である。この点を押さえることで、格体制の現れ方を適切に捉えることができる。事態が位置変化に見えている時には状態変化には見えないので、動詞が～ニ～ヲという格体制をとっている時に～ヲ～デという格体制が同時に出てくることはない。また、事態が状態変化に見えている時には位置変化には見えないので、動詞が～ヲ～デという格体制をとっている時に～ニ～ヲという格体制が同時に出てくることもないのである。(川野 (2021: 35))

本稿が「しお」と「塩化ナトリウム」に関して強い認知主義に基づく認知意味論的分析の問題点として提示したことを、川野は「壁塗り代換」に関して強みとして提示しているわけである。

弱い認知主義に基づく認知意味論的分析では表 13 のようになる。

言語表現 (構文)	概念構造 (フレーム)	概念構造内の指示対象 注意が向けられる概念構造内の側面
使役移動	ある種の事象	<物の移動>
状態変化		<移動先の状態変化>

表 13 場所格交替についての弱い認知主義に基づく認知意味論的分析

西村 (2002) は、場所格交替については以下のように述べている。

- (30) a. They loaded hay onto the truck.
 b. They loaded the truck with hay. (西村 (2002: 303))
- (31) a. She stuffed feathers into the pillow.
 b. She stuffed the pillow with feathers. (西村 (2002: 304))

- (32) [30] や [31] のような所格交替の典型例に現れる動詞がいずれの構文においても喚起するフレームは〈X が Y を Z に移動させることによって、Z に状態変化をもたらす〉(load の場合には〈人がものを容器に積載することによって、その容器が本来の機能を果たす状態にする〉) であるが、この共通のフレームの中で、池上 (1981,2000) などが指摘するように、a は (Y の Z への) 〈移動〉の局面に、b は (Z の) 〈状態変化〉の局面に、それぞれ焦点を合わせている (a と b で Y と Z がそれぞれ直接目的語として表現されるのはその反映である) と考えられる。(西村 (2002: 303))

ちなみに、川野 (2021) が (29) で危惧した問題は、弱い認知主義に基づく認知意味論的分析では発生しない。概念化の主体が〈物の移動〉の側面に注意を向けるときは、〈移動先の状態変化〉の側面は(「見えて」いても)注意が向けられず、また〈移動先の状態変化〉の側面に注意を向けるときは、〈物の移動〉の側面は注意が向けられないためである²⁶。

非認知主義的な認知意味論的分析では表 14 のようになる

言語表現 (構文)	外界における事象	外界の指示対象 事象の側面 (構成要素) の うち注意が向けられる先
使役移動	ある種の事象	〈物の移動〉
状態変化		〈移動先の状態変化〉

表 14 場所格交替についての非認知主義的な認知意味論的分析

非認知主義的な認知意味論的分析においても、(29) に示された川野 (2021) の危惧は現実化しない。概念化の主体が〈物の移動〉の側面に注意を向けるときは、〈移動先の状態変化〉の側面は(「見えて」いても)注意が向けられず、また〈移動先の状態変化〉の側面に注意を向けるときは、〈物の移動〉の側面は注意が向けられないためである。

²⁶ なお、川野 (2020, 2021) は自身の「意味類型」によるアプローチと西村 (2002) らのアプローチの違いを強調している。ただし川野 (2021: 232 注 3) は、場所格交替において 2 つの構文の指示対象が同じなのか異なるのか (したがって川野自身のアプローチと西村 (2002) らのアプローチのどちらが優れているのか) を経験的に確認することは不可能であるという趣旨のことを述べている。

場所格交替に関しては、Wechsler (2015) が次のデータを提示している。

- (33) a. John completely loaded the hay on the wagon.
 b. John completely loaded the wagon with hay.
 (Wechsler (2015: 94))
- (34) The holistic effect is strengthened (or made more salient) through modification with *completely* or *partly*, as noted by Dowty (1991: 590). Example [33a] suggests that no hay remains unloaded, although space may remain in the wagon. In contrast, [33b] suggests that the wagon is full, while some hay may remain unloaded.
 (Wechsler (2015: 94))

これについて、強い認知主義に基づく認知意味論的分析では、次のような説明になる。事象が〈物の移動〉として捉えられる場合には、*completely* はその移動の完全性を表す。事象が〈移動先の状態変化〉として捉えられた場合には、*completely* はその状態変化の完全性を表す。

弱い認知主義に基づく認知意味論的分析では、次のような説明になる。当該の事象についての概念が持つ諸側面のうち、〈物の移動〉という側面に注意が向けられている場合には、*completely* はその移動の完全性を表す。〈移動先の状態変化〉の側面に注意が向けられている場合には、*completely* はその状態変化の完全性を表す。

非認知主義的な認知意味論的分析では、次のような説明になる。当該の事象が持つ諸側面のうち、〈物の移動〉という側面に注意が向けられている場合には、*completely* はその移動の完全性を表す。〈移動先の状態変化〉の側面に注意が向けられている場合には、*completely* はその状態変化の完全性を表す。

場所格交替についての各分析の考え方をまとめると次のようになる。

- (33') a. John (completely) loaded the hay on the wagon.
 b. John (completely) loaded the wagon with hay.
- (35) 素朴な指示対象意味説
- a. 意味＝外界の事象（外界の指示対象）
 - b. 2つの構文は、同じ事象を指示対象にできる限りにおいて、意味は同じ。
 - c. 意味の違いは指示対象の違いに対応。

- d. 構文の使い方の違いは意味の違いによるもの？ 使用（コンテキスト）によるもの？
- e. コンテキストとは？
- f. completely の解釈の違いがどう説明されるかは不明²⁷。

(36) 強い認知主義に基づく認知意味論

- a. 意味＝外界の指示対象に対する捉え方
- b. 2つの構文は、意味が違う。指示対象は同じ外界の事象だが、捉え方が違う。
- c. 使役移動構文は、当該の事象を、物の移動として捉えている。
- d. 状態変化構文は、当該の事象を、移動先の状態変化として捉えている。
- e. 意味の違いは指示対象としての事象をどのようなものとして捉えるかの違い。
- f. 構文の使い方の違いは意味の違いに由来。
- g. completely の解釈の違いは意味の違いに由来。

(37) 弱い認知主義に基づく認知意味論

- a. 意味＝事象に対する捉え方
- b. 2つの構文は、意味が違う。事象概念が持つ諸側面のうちの、注目・指示（指示）される側面（プロファイル）が違う。
- c. 使役移動構文は、当該の事象概念が持つ諸側面のうち、物の移動という側面に注目（指示）（プロファイル）している。
- d. 状態変化構文は、当該の事象概念が持つ諸側面のうち、移動先の状態変化という側面に注目（指示）（プロファイル）している。
- e. 意味の違いは事象概念が持つ諸側面のうち、どの側面に注目（指示）するかの違い。
- f. 構文の使い方の違いは意味の違いに由来。
- g. completely の解釈の違いは意味の違いに由来。

²⁷ 両構文が同義であるという立場を放棄すれば可能であろうが、この立場を維持する限り、説明は困難と思われる。

(38) 非認知主義的な認知意味論（一周回った指示対象意味説）

- a. 意味＝事物に対する捉え方
- b. 2つの構文は、意味が違う。当該の事象の持つ諸側面のうちの、注目（指示）される側面が違う。
- c. 使役移動構文は、当該の事象が持つ諸側面のうち、物の移動という側面に注目（指示）している。
- d. 二重目的語構文は、当該の出来事の諸側面のうち、移動先の状態変化という側面に注目（指示）している。
- e. 意味の違いは当該の事象の持つ諸側面のうち、どの側面に注目（指示）するかの違い。
- f. 構文の使い方の違いは意味の違いに由来。
- g. completely の解釈の違いは意味の違いに由来。

5 構文の類義性: 「2つの構文は意味が似ている」という直観をどう理論的に把握するか

いわゆる「構文交替」が言語研究において問題になる背景には、「2つ（ないしそれ以上）の構文の意味が似ている」という直観があることによる。この直観を理論的にどう把握するかが問題になる。

認知意味論が（素朴な）指示対象意味説を棄却して「形式が違えば意味が異なる」と考える立場を採っていること、また認知文法・構文文法が派生 (derivation) を想定しない理論であることから、認知言語学では構文交替に関して概して、「2つの構文は意味が異なる」という点が強調される傾向があった。しかしながら、構文交替において「2つの構文の意味が似ている」という直観が話者にあることも確かであり²⁸、この直観を何らかの形で理論的に把握することが必要になるわけである。

なお、本節では便宜上複合表現としての「構文」を対象として議論するが、ここでの議論が「語」についても適用されることは言うまでもない。したがって、複数の「構文」の類義性についての議論は、「しお」と「塩化ナトリウム」のようないわゆる「類義語」の類義性の議論としても成立するものである。

²⁸ 構文間の類義関係に心的実在性があることを理論的に主張した研究として Cappelle (2006) があり、これを実験によって示した研究として Perek (2012) がある。

素朴な指示対象意味説では、複数の構文の類義性は、どちらの構文も同じ外界の事象を指示対象にできることによる、となる。複合表現としての構文についてではないが、(9) (再掲) を「文脈にしばられた類義性」と特徴づける村木 (1993) の立場は、これに該当する。

- (9) a. 男は道端にコスモスを見つけた。そっと近づいてその花のかおりをかいだ。
 b. ベランダに出てみると、そこは日の光をうけてあたたかかった。
 c. 息子をさがしたのだが、信夫の姿はどこにもなかった。
 (村木 (1993: 89); 下線原文。)

強い認知主義に基づく認知意味論的分析においても同様に、2つの構文の類義性は、どちらの構文も同じ外界の事象を指示対象にできることによる。実際、川野 (2021: 32-33) はそのような趣旨の主張を提示している。

弱い認知主義に基づく認知意味論的分析においては、2つの構文の類義性は、どちらの構文も同じ事象概念の一側面をプロファイルしており、どちらの構文も同じように当該の事象概念全体に注意を向けさせる (事象概念全体を活性化させる) ことによる。

これに関連するものとして、次の西村 (2002) の議論が挙げられる。西村は与格交替の例 (17) (再掲) に関して、次のように述べている。

- (17) a. Sally sent a letter to Harry.
 b. Sally sent Harry a letter.
 (39) 焦点化される局面の違いにも拘わらず、いずれの用法においてもフレーム全体が活性化されていることも、Langacker が強調しているとおりである (ハリーによる手紙の所有と郵便制度を利用したハリーの領域への手紙の移動は、背景化されてはいても、[17a] と [17b] の意味にそれぞれ含まれている)。
 (西村 (2002: 300))

また、構文文法 (Goldberg (1992, 1995) など) での扱いについては、Goldberg (2002) が “paraphrase relations” に関して次のように述べている。

- (40) We are now in a position to address the question of how the overlap in meaning between alternants is accounted for. The shared meaning can be attributed directly to the shared verb involved.

That is, the verb evokes the same frame semantic scene and the same profiled participant roles. For example if we assign the participant roles of *load* the labels loader, loaded-theme and container, we can see that these roles line up with the roles in the caused motion construction and causative+*with* constructions as [in [41].]

(Goldberg (2002: 343-344); 下線本多。)

- (41) a. Caused-motion (e.g., *Pat loaded the hay onto the truck*)
 CAUSE-MOVE (cause theme path/location)
 Load (loader loaded-theme container)
- b. Causative construction+*with* construction (e.g., *Pat loaded the truck with hay*)
 CAUSE (cause patient) + INTERMEDIARY (instrument)
 Load (loader container loaded-theme)
- ((Goldberg (2002: 344)); 強調原文。)

Goldberg の構文文法においては、構文それ自体が持つ類義性を問題にする手立てがない²⁹。というより、構文の「交替」という概念を積極的に棄却している。ただ、構文文法では (41) に現れる 2 つの *load* は同義 (同一義) であると考え³⁰、したがって同一のフレーム (事象概念) を喚起すると考えるため、*load* の持つ参与者役割がどちらの構文においてもすべて項役割として実現している場合には、同一のフレームが複数の構文において同じように活性化されるため、両構文に類義性が生じると考えることになるわけである³¹。

非認知主義的な認知意味論においては、2 つの構文の類義性は、どちらの構文も同じ外界の事象について述べることができる (同じ外界の事象を話題にすることができる) ことによる。ちなみにこのアプローチでは、「2 つの構文は、どちらの構文も同じ外界の事象を指示対象にしている」という、素朴な直観に基づく考え方は、2 つの構文がどちらも同じ外界の事象を話題にできることに起因すると考えることになる

なお、脱線になるが、構文文法で提出された考え方として、「異構文 (al-

²⁹ この点については早瀬 (2020: 181-183) も参照。

³⁰ 同一の *load* が複数の異なる構文に現れていると考える。

³¹ なお、西村 (2002) は共通のフレームを構文に関連づけていると解釈できるのに対して、Goldberg (2002) は共通のフレームを動詞に関連づけている。この点で両者の立場には相違がある。

lostruction)」というものを想定するアプローチ (Cappelle (2006)) がある。これは形態論における異形態 (allomorph) の概念を拡張したもの (Cappelle (2006: 21)) で、原理としては、単一の構文に対して「意味を共有するが、形式は違う」という複数の異構文を想定する考え方である。

認知文法・構文文法では、形態素から語、文法構文、さらにはそれより大きな言語表現にいたるまで、意味を持つ言語単位をすべて形式と意味の慣習的な組み合わせと考える。その立場を採る限り、異形態からの一般化としての「異構文」という考えは、それ自体原理的には評価されるべきものである。

ただ、実際に異構文における形式として Cappelle (2006) が想定しているのは、[V Prt NP_{DirectO}]、[V NP_{DirectO} Prt] といった統語構造である。ということは、この考え方は統語構造に意味とは独立に記述できる面があることを積極的に主張していることになる。つまり、そのことの良し悪しは別として、Cappelle (2006) の考え方は統語論の自律性を少なくとも部分的には許容するものである^{32 33}。

Perek (2012) は Cappelle (2006) の異構文の考えを継承し、構文交替の関係にある複数の異構文間の意味の違いを認めたくえて、それらの形式面と意味面の共通性を捉えた上位レベルの構文として「構文素 (constructeme)」というものを提唱している³⁴。これについての評価は本稿では保留としたい。

また、異構文によるアプローチでは異構文と別構文の区別を明確にする必要がある。それができないと、「しお」と「塩化ナトリウム」を別語ではなく同一語の異形態と考えざるをえなくなる可能性が出てくる。

6 事例: メトニミー

ここで、メトニミーについて簡単に触れておく。

(42) 落合選手は一年中鍋を食べているそうだ。

(初山 (1998: 60); 下線原文。)

(42) に例示されるメトニミーは一般に隣接関係 (または近接関係) に基づ

³² 言語事実の問題として、[V Prt NP_{DirectO}] と [V NP_{DirectO} Prt] は相補分布せず、かつ情報構造上の違いがある (Cappelle (2006: 19-21))。したがってこの 2 つは異形態と同じ性質のものとは言えない。(早瀬 (2020: 188-189) も参照。) ただしそれはここで議論している統語論の自律性とは別の次元の問題である。

³³ Goldberg (1995) 流の構文文法にはこれとは別のレベルでも統語論の自律性を許容する面がある。その点については詳しくは Langacker (2005) を参照されたい。

³⁴ これが注 28 で言及した「心的実在性」の実質に当たる。

く比喻と言われるが、この隣接関係が「どこに」あると想定するかは立場の違いが現れる。もっとも、隣接関係が「どこに」あるかが明示的に問題にされることは必ずしも多くはない。だが、問題にしている研究があることは確かである。

Taylor (1995) はメトニミーについて次の a, b の 2 つの考え方を紹介し、c のように続けている。

- (43) a. Traditional rhetoric defines metonymy as a figure of speech whereby the name of one entity e^1 is used to refer to another entity e^2 which is contiguous to e^1 . (Taylor (1995: 122))
- b. These examples suggest that the essence of metonymy resides in the possibility of establishing connections between entities which co-occur within a given conceptual structure.
(Taylor (1995: 123-124))
- c. This characterization [= [43b] — 本多注] suggests a rather broader understanding of metonymy than that given by traditional rhetoric. The entities need not be contiguous, in any spatial sense. (Taylor (1995: 124); 下線本多。)

(43b) は、隣接関係を概念構造の中にあるものと想定する立場である。(43a) では、隣接関係が「どこに」あると考えられているか明確ではない。ただ、(43c) を踏まえると、そして (43b) で「概念構造」が (43a) と対比的に言及されていることを考えると、(43a) では隣接関係は暗黙のうちに外部世界にあると想定されていると考えて差し支えないと思われる。

Radden and Kövecses (1999) は、まとめて次のように述べている。

- (44) Traditional approaches [to metonymy — 本多注] locate contiguity relationships in the world of reality, whereas cognitive approaches locate them at the conceptual level.
(Radden and Kövecses (1999: 19))

メトニミーにおける隣接関係を概念構造にあると考える立場は意味のありかを概念構造と想定する概念主義の立場を採るものであり、本稿で言う意味で認知主義的ということができる。それに対して隣接関係を外部世界にあると想定する立場は、非認知主義的ということができる。

瀬戸 (1997) はメトニミーを次のように規定している。

- (45) メトニミーとは、(現実) 世界のなかで隣接関係にあるモノとモノとの間で、一方から他方へ指示がずれる現象のことを言う。
(瀬戸 (1997: 105); 下線本多。)³⁵

隣接関係を「(現実) 世界のなか」に位置づけている限りにおいて、この規定は本稿で言う意味で非認知主義的と言える。

Lakoff (1987) はメトニミーについて次のように述べている。

- (46) In general, a metonymic model has the following characteristics:
- There is a “target” concept *A* to be understood for some purpose in some context.
 - There is a conceptual structure containing both *A* and another concept *B*.
 - *B* is either part of *A* or closely associated with it in that conceptual structure. Typically, a choice of *B* will uniquely determine *A*, within that conceptual structure.
 - Compared to *A*, *B* is either easier to understand, easier to remember, easier to recognize, or more immediately useful for the given purpose in the given context.
 - A metonymic model is a model of how *A* and *B* are related in a conceptual structure; the relationship is specified by a function from *B* to *A*.

When such a conventional metonymic model exists as part of a conceptual system, *B* may be used to stand, metonymically, for *A*.

(Lakoff (1987: 84-85); 下線本多。)

ここで述べられていることは Langacker (1993) などが提唱する参照点能力に基づくメトニミー論と実質的に同じであるが、それはともかく、ここに述べ

³⁵ Seto (2003) には次のようにある。趣旨は同じである。

- (i) Metonymy is a referential transfer phenomenon based on spatiotemporal contiguity as conceived by the speaker between an entity and another in the (real) world.
(Seto (2003: 196); 下線本多。)

られた Lakoff の立場はメトニミーを概念構造の問題と考えている点で、やはり認知主義的と言える。

靱山 (1998) は (47) に関して (48) のように述べている。

(47) 落合選手は一年中鍋を食べているそうだ。 (= (42))

(48) …例文 [47] の「鍋」という語が、<鍋>と隣接している (<鍋>という容器の中身である) <食べ物>を指し示すというように、「2つの事物の外界における隣接性に基づいて、一方の事物を指す形式を用いて、他方の事物を指す」という比喻を換喩と呼ぶ (換喩に含める) …
(靱山 (1998: 61); 下線本多。)

これは非認知主義的な立場である。

上記 (46) の Lakoff のメトニミー論については、靱山は次のように述べている。

(49) 以上から、まず Lakoff (1987) は、metonymy を単に言葉の問題ではなく、概念 (構造) のレベルで捉えていることがわかる。
(靱山 (1998: 76))

最近では、靱山 (2010) はメトニミーについて (50) のように述べている。

(50) メトニミーとは、2つの事物の外界における「隣接性 (contiguity)」、さらに広く2つの事物・概念の思考内、概念上の「関連性」に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喻のことで。 (靱山 (2010: 44); 太字は原文、下線は本多。)

これは、形の上では Taylor の (43) の a と b を接合したものになっている。だがここでの靱山の力点は後半部分にあり、こちらは概念主義を採る議論となっている。その意味でこれは認知主義的な色彩の強い規定と言える。また靱山 (2010: 48-50) はメトニミーの成立基盤を Langacker の参照点能力に求めており、その点においても靱山 (2010) は認知主義的なメトニミー観を採っていると見える。

メトニミーについての次の西村 (2008, 2018b) の規定は認知主義的である³⁶。

³⁶ これとの関連で Croft (1993) のメトニミー論も参照。

(51) 換喩は、ある言語表現の複数の用法が、単一の共有フレームを喚起しつつ、そのフレーム内の互いに異なる局面ないし段階を焦点化する現象として定義することができるであろう。³⁷

(西村 (2008: 82), 西村 (2018b: 99); 下線は西村 (2018b) による。)

7 まとめ

以上、本稿は、概念主義と現実構成主義としての「認知主義」をキーワードに、認知意味論の内外でこれまで提示されてきた、あるいは今後提示される可能性のある、議論や考え方のいくつかを位置づけることを試みてきた。これは、「非認知主義的な認知意味論」(概念主義・現実構成主義によらない捉え方の意味論)の可能性を探る試みのための基礎作業の一部である。具体的には、言語の意味に関わる議論や考え方を、可能な限りで次の4つに分類してきた。

- (7) a. 素朴な指示対象意味説
- b. 強い認知主義に基づく認知意味論
- c. 弱い認知主義に基づく認知意味論
- d. 非認知主義の認知意味論

本稿での議論を踏まえてこの4つの立場の相互関係を暫定的に表で示すと、表15のようになる。

	概念主義かどうか	
	指示対象を外界に求める	指示対象を概念構造に求める
指示対象=何かの全体	素朴な指示対象意味説	強い認知主義に基づく認知意味論
指示対象=何かの側面	非認知主義的な認知意味論	弱い認知主義に基づく認知意味論

表 15 4つの立場の相互関係

表の左右は概念主義かどうかに関わる。そして概念主義のアプローチに関しては、表の上下が現実構成主義の程度に関わる。

このように見ると、本稿で言う「強い認知主義に基づく認知意味論的分析」は、「素朴な指示対象意味説に基づく分析」の裏返しであることになる。また、

³⁷ この規定からも明らかなように、西村 (2002, 2008) は構文交替をメトニミー現象の一つと考えている。

本稿で言う「非認知主義的な認知意味論的分析」は「一周回った指示対象意味説」と特徴づけられるものでもあるが、これは、指示対象を（外界の事物の）注意が向けられる側面と考えることで、「捉え方の意味論」としての認知意味論の考え方が、指示対象意味説と両立可能であることを示すものでもある。

認知言語学は、言語の学であると同時に認知の学でもある。本稿の試みが、認知の学としての認知言語学の歩みを前に進めるための基礎研究に位置づけられることを望む。

参考文献

- Adams, F. and Aizawa, K. (2010). The Value of Cognitivism in Thinking about Extended Cognition, *Phenomenology and the Cognitive Sciences* **9**, 579–603.
- Cappelle, B. (2006). Particle Placement and the Case for ‘Allostructions’, *Constructions*. <https://hal.archives-ouvertes.fr/hal-01495786>.
- Coventry, K. R. (2019). Space, In Dąbrowska and Divjak (eds.) *Cognitive Linguistics: Key Topics*, 44–65, De Gruyter Mouton.
- Croft, W. (1993). The Role of Domains in the Interpretation of Metaphors and Metonymies, *Cognitive Linguistics* **4** (4), 335–370.
- Dowty, D. R. (1991). Thematic Proto-roles and Argument Selection, *Language* **67** (3), 547–619.
- Fillmore, C. J. (1982). Frame Semantics, In The Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*, 111 – 137, Hanshin Publishing Co.
- Gibson, J. J. (1979). *The Ecological Approach to Visual Perception*, Houghton Mifflin.
- Goldberg, A. E. (1992). *Argument Structure Constructions*, Doctoral dissertation, UC Berkeley.
- Goldberg, A. E. (1995). *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, The University of Chicago Press.
- Goldberg, A. E. (2002). Surface Generalizations: An Alternative to Alternations, *Cognitive Linguistics* **13** (4), 327–356.
- Grady, J. E. (1997). *Foundations of Meaning: Primary Metaphors and*

- Primary Scenes*, Doctoral dissertation, UC Berkeley. Available from <https://escholarship.org/uc/item/3g9427m2>.
- Green, G. M. (1974). *Semantics and Syntactic Regularity*, Indiana University Press.
- Haiman, J. (1980). Dictionaries and Encyclopedias, *Lingua* **50**, 329–357.
- Honda, A. (1994). An Inquiry into the Semantics of Motion, Location and Viewing, *Linguistic Research* **12**, 23–67. Tokyo University English Linguistics Association.
- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, The University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1986). An Introduction to Cognitive Grammar, *Cognitive Science* **10** (1), 1–40. Langacker (1991: Ch. 1).
- Langacker, R. W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar*, Volume I: *Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1991). *Concept, Image, and Symbol*, Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (1993). Reference-Point Constructions, *Cognitive Linguistics* **4** (1), 1–38.
- Langacker, R. W. (2005). Construction Grammars: Cognitive, Radical, and Less So, In Ruiz de Mendoza Ibáñez and Peña Cervel (eds.) *Cognitive Linguistics: Internal Dynamics and Interdisciplinary Interaction*, 101–159, Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (2008). *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press.
- Langacker, R. W. (2019). Construal, In Dąbrowska and Divjak (eds.) *Cognitive Linguistics: Foundations of Language*, 140–166, De Gruyter Mouton.
- Levin, B. (1993). *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, The University of Chicago Press.
- Perek, F. (2012). Alternation-based Generalizations are Stored in the Mental Grammar: Evidence from a Sorting Task Experiment, *Cognitive Linguistics* **23** (3), 601–635.
- Radden, G. and Kövecses, Z. (1999). Towards a Theory of Metonymy, In K.-U. Panther and G. Radden (eds.) *Metonymy in Language and*

- Thought*, 17–59, John Benjamins Publishing Company.
- Reed, E. S. (1995). The Ecological Approach to Language Development: A Radical Solution to Chomsky's and Quine's Problems, *Language & Communication* **15** (1), 1–29.
- Reed, E. S. (1996). *Encountering the World: Toward an Ecological Psychology*, Oxford University Press.
- Seto, K. (2003). Metonymic Polysemy and its Place in Meaning Extension, In B. Nerlich, et al. (eds.) *Polysemy: Flexible Patterns of Meaning in Mind and Language*, 195–214, Mouton de Gruyter.
- Talmy, L. (2000). *Toward a Cognitive Semantics*, Two Volumes, The MIT Press.
- Taylor, J. R. (1995). *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory* (Second Edition), Clarendon Press.
- Wechsler, S. (2015). *Word Meaning and Syntax*, Oxford University Press.
- 井上拓也 (2018). 「アフォーダンス知覚を促すデザインとしての言語—生態学的言語論の理論的考察—」『生態心理学研究』**11** (2), 59–62. https://doi.org/10.24807/jep.11.2_59 より入手可。
- 大堀 壽夫 (2002). 『認知言語学』 東京大学出版会。
- 川野 靖子 (2016). 「壁塗り代換は、なぜヴォイスのカテゴリーに入らないのか」『埼玉大学紀要 教養学部』**51** (2), 81–93. <http://doi.org/10.24561/00016010> より入手可。
- 川野 靖子 (2020). 「壁塗り代換における位置変化用法と状態変化用法の関係について: 多義との違いは何か」『埼玉大学紀要 教養学部』**55** (2), 37–50. <http://doi.org/10.24561/00018933> より入手可。
- 川野 靖子 (2021). 『壁塗り代換をはじめとする格体制の交替現象の研究: 位置変化と状態変化の類型交替』 ひつじ書房。
- 河野 哲也 (2003). 『エコロジカルな心の哲学』 勁草書房。
- 小早川 暁 (2018). 「モノとコトの認知文法論」 西村 (2018a: 163-223).
- 佐々木 正人 (2015). 『新版 アフォーダンス』 岩波書店。
- 瀬戸 賢一 (1997). 「意味のレトリック」 卷下 吉夫・瀬戸 賢一 (編) 『文化と発想とレトリック』 93–177, 研究社出版。
- 西村 義樹 (2002). 「換喩と文法現象」 西村 義樹 (編) 『認知言語学 1: 事象構造』, 285–311, 東京大学出版会。

- 西村 義樹 (2008). 「換喩の認知言語学」 森 雄一ほか (編) 『ことばのダイナミズム』 71-88, くろしお出版.
- 西村 義樹 (編) (2018a). 『シリーズ認知言語学入門第 4 巻 認知文法論 I』 大修館書店.
- 西村 義樹 (2018b). 「文法の中の換喩」 西村 (2018a: 89-116).
- 西村 義樹・野矢 茂樹 (2013). 『言語学の教室: 哲学者と学ぶ認知言語学』 中央公論新社.
- 早瀬 尚子 (2020). 「第 II 部 構文文法」 坪井 栄治郎・早瀬 尚子 (編) 『認知文法と構文文法』 121-255, 開拓社.
- 廣瀬 幸生 (2003). 「H₂O をどう呼ぶか—対照研究における相対主義と認知主義 (上)(下)」 『言語』 **32** (6): 80-88, **32** (7): 78-87.
- 深田 智・仲本 康一郎 (2008). 『概念化と意味の世界: 認知意味論のアプローチ』 研究社.
- 福地 肇 (1985). 『談話の構造』 大修館書店.
- 本多 啓 (1994). 「見えない自分、言えない自分: 言語にあらわれた自己知覚」 『現代思想』 **22** (13), 168-177. (1994 年 11 月号).
- 本多 啓 (2003). 「認知言語学の基本的な考え方」 辻 幸夫 (編) 『認知言語学への招待』 63-125, 大修館書店. (シリーズ認知言語学入門第 1 巻).
- 本多 啓 (2005). 『アフォーダンスの認知意味論—生態心理学から見た文法現象』 東京大学出版会.
- 本多 啓 (2013a). 「言語とアフォーダンス」 河野 哲也 (編) 『倫理: 人類のアフォーダンス』 77-103, 東京大学出版会.
- 本多 啓 (2013b). 『知覚と行為の認知言語学—「私」は自分の外にある』 開拓社.
- 本多 啓 (2016). 「Subjectification を三項関係から見直す」 中村 芳久・上原 聡 (編) 『ラネカークの (間) 主観性とその展開』 91-120, 開拓社.
- 本多 啓 (2019). 「生態心理学と認知言語学」 辻 幸夫 (編) 『認知言語学大事典』 669-681, 朝倉書店.
- 本多 啓 (2021a). 「認知意味論の基本的な考え方—意味と知識と指示対象、構文と意味—」 (中京大学特別講義、2021 年 3 月 5 日).
- 本多 啓 (2021b). 「可能表現と原因帰属」 『神戸外大論叢』 **73** (2), 93-155.
- 本多 啓 (2021c). 「時間の前置詞 In と On について」 『神戸外大論叢』 **74**. (本号)

- 村木新次郎 (1993). 「現代語の語彙・語彙論」 工藤浩ほか (編) 『日本語要説』 77-105, ひつじ書房.
- 朮山洋介 (1998). 「換喩 (メトニミー) と提喩 (シネクドキー) — 諸説の整理・検討—」 『名古屋大学日本語・日本文化論集』 6, 59-81.
- 朮山洋介 (2010). 『認知言語学入門』 研究社.
- 山梨正明 (2021). 『言語学と科学革命—認知言語学への展開』 ひつじ書房.
- 吉川正人 (2021). 「認知言語学の社会的展開に向けて—「拡張された認知」が切り開く認知言語学の新たな可能性—」 篠原和子・宇野良子 (編) 『実験認知言語学の深化』 213-238, ひつじ書房.

Keywords: 概念主義 現実構成主義 捉え方の意味論 構文交替 メトニミー